

男はつらいよ（第1作）

観賞日 2017・8・7

制作 1969年 松竹

上映時間 91分

監督 山田洋次

脚本 山田洋次

出演 渥美清、倍賞千恵子、森川信、三崎千恵子、前田吟、笠智衆、光本幸子
(あらすじ)

20年ぶりに寅次郎(渥美清)は故郷柴又に帰ってきた。「とらや」ではおいちゃん(森川信)、おばちゃん(三崎千恵子)、妹さくら(倍賞千恵子)は暖かく迎えてくれた。歓迎会で飲み過ぎて、二日酔いのおいちゃんに代わって、寅次郎がさくらの見合いに付き添っていくが、調子に乗って大失態して見合いを壊してしまった。怒るおいちゃんと大喧嘩の末、寅次郎は再び旅に出る。旅先の奈良で、御前様(笠智衆)と娘の冬子(光本幸子)に出会い、二人と一緒に柴又に帰ってきた。さくらは隣の印刷工場の工員の博(前田吟)に好意を持っており、博もさくらに惚れている。ひともんちゃくあったが、印刷工場のタコ社長夫妻の媒酌で二人はささやかな結婚式を挙げた。北海道の博の両親も来てくれた。

寅次郎は御前様の娘冬子に熱をあげた。ボートに乗ったり、飲み屋で酒の相手をしたり、冬子の気晴らしの相手をして熱は上がるばかりである。しかし、約束した魚釣りの日、寅次郎は冬子と婚約者の仲睦まじい姿を見て、そっと去っていく。「とらや」では、寅次郎の失恋の噂でもちきりである。押し入れに隠れていた寅次郎は皆聞いてしまった。そして、さくらに送られて再び旅に出た。一年後、さくらに子供が生まれた。御前様は寅次郎にそっくりだという。そのころ、寅次郎は啖呵売りに声を張り上げていた、

(解説)

48本作られた『男はつらいよ』シリーズの第1作。第1作の動員数は56万人だが、第8作『寅次郎恋歌』では100万人を超え、第10作『寅次郎夢枕』では200万人を突破、最高動員数は第12作『私の寅さん』で241万9千人で、以降も常に100万人~200万人を超す人気番組となった。舞台は葛飾柴又、帝釈天参道の団子屋「とらや」。寅次郎の「おいちゃん」(森川信、松村達雄、下條正巳)、「おばちゃん」(三崎千恵子)、妹さくら(倍賞千恵子)、亭主の博(前田吟) 午前様(笠智衆)。タコ社長(太宰久)とメンバーはほぼ固定され、これに毎回マドンナ役の美女が登場する。寅次郎は毎回のようにマドンナに恋をして、周りをヤキモキさせて結局は振られてしまう。全48作はこのパターンだが、マンネリズムに堕ちそうで堕ちずにそのスタイルを持ち続けたのは見事である。この第1作は以降続く『男はつらいよ』シリーズの原点であり、方向が示されている。